

「～になる」と「～となる」の使い分け

—— アンケート調査に基づく考察 ——

作 間 大 樹

1 はじめに

日本語学習者が日本語を習得するにあたって、助詞の機能、及び個々の動詞が要求する格助詞の把握が困難であることがしばしば指摘される。また、動詞が表す意味がほとんど変わらない場合であっても、発話中の格助詞の選択に違いが見られることがあり、そのことが日本語の理解を一層難しくしているとも考えられる。

日本語学習者の多くは、用法の似た言葉について理論的な説明を求める事が多い。しかし、多くの日本語母語話者はそれらの使い分けを無意識に行っており、はっきりした結論を導き出せない場合がほとんどである。日本語学習者の要求に応えるためには、そうした、日本語母語話者の無意識による使い分けのルールを浮き彫りにさせなければならない。

本稿では、日本語学習者から疑問の一つとして挙げられた『「～になる」と『～となる』の用いられ方にはどのような違いがあるのか』ということについて、日本語母語話者を対象としたアンケートをもとに、調査・分析を行っていく。動詞「なる」は、変化の結果を表す場合に格助詞「に」と「と」を要求し、それぞれ「～になる」「～となる」の形を取るが、その用途は共通する部分が多く、一概にどちらを用いるべきかという線引きが無い場合も多い。本調査では、主として「～になる」「～となる」のどちらの形でも用いられる場合を取り上げ、分析を行う。

2 研究の目的と意義

「～になる」「～となる」が、それぞれどのような場面で用いられ、そこに使い分けのルールが存在するのか、またそれがどのようなものであるのかを明らかにすることで、日本語学習者の日本語習得の一助とする。また、日本語母語話者の使い分けにはいかなる意識が働いているのかを明らかにしたい。

3 先行研究

「～になる」「～となる」の用法について、鈴木（1975）は、平安時代語における相違を示しており、「平安時代語に於いては、『ニナル』は実質的用法にも形式的用法にも用いられるが、『トナル』は特殊な場合を除けば、殆ど実質的用法にしか用いられないというのがその結論である」と述べている。ここで言う「実質的用法」「形式的用法」とは、鈴木（1975）の定義によれば、以下のようなものである。

表3-1 平安時代語における「ナル」の用法

鈴木 (1975) より

- ・実質的用法 (主体のあり方の変化を表わすもの)
例: この二人の太政大臣は、やがて、みかど、なり給。(大鏡)
- ・形式的用法 (位置・量・年齢・程度を測るもの)
例: この山にすむ事、八年になりぬ。(宇津保物語)

すなわち、「なる」に、実際の変化のニュアンスが含まれる場合を実質的用法とし、それ以外の意味を持つ場合を形式的用法としている。この分類を基に、鈴木 (1975) は「～になる」は実質的用法・形式的用法のいずれにも用いられているが、「～となる」はそのほとんどが実質的用法にしか用いられていないという点を指摘している。また、主体の身分から、話し手・書き手が強調の意思を持った場合には「～となる」が用いられると述べている。これらは平安時代語に関するものであるが、現代語においてもこうした傾向が当てはまるのかどうかを検証したい。

森田 (1994) は、「格支配が語義に影響を与えていると思われる」動詞の一つに「なる」を挙げている。その語義と、それぞれが要求する格を以下のように示している。

表3-2 「なる」の用法と要求する格助詞

森田 (1994) より

【なる】

…ガ～	〈達成、完成〉	三連覇が～／新校舎が～
…カラ～	〈成立〉	12の章から～／酸素と水素から～
…ニ～	〈価値を帯びる〉	100円に～／薬に～／為に～
…ト (ニ)～	〈変化〉	空地が公園に～

森田 (1994) の説に則った場合、「～となる」の形で用いられるものは、〈変化〉を示す場合のみである。しかし、「～になる」と「～となる」が非常に近い用いられ方をしているため、同じ格助詞「に」を要求する〈価値を帯びる〉場合にも日本語母語話者が「～となる」とする場合は少なくないのではないだろうか。

鈴木 (1975) の指摘や森田 (1994) の記述から、「～となる」が用いられている場合に「～になる」を用いることは可能であるが、その逆のパターンは成り立ちにくいことがわかる。すなわち、「～になる」は「～となる」の意味を包括的に含んでいると言え、「～になる」を用いておけば概して問題はない。では、「～となる」が積極的に用いられるのは、どのような場合であるのか。

Makino & Tsutsui (1995) は、外国人を対象とした日本語文法辞典の中で、「となる」はもっぱらフォーマルな場面や書き言葉において用いられるという説明を施している。原文とその翻訳は以下の通りである。「*To naru is similar in meaning to ni naru. To naru, however, is more formal and is used exclusively in written language.*」(『となる』は『になる』と似たような意味を持つ。しかしながら、『となる』はより公的であり、もっぱら書き言葉の場合に用いられる) (訳: 筆者)

本調査では、いくつかの設問において、フォーマルな場面や、書き言葉の例を設定した。これらの解説が、実際の日本語母語話者の感覚とどれほど合致しているのかを確かめたい。

朴（1988）は、変化の結果を表している「～になる」と「～となる」について、新聞記事に見られる実例を取り上げ、その用法の違いについて、「話し手の評価の有無」を唱えており、次のように述べている。『「トなる」は話し手（又は書き手）がその変化の結果を評価している場合——従って、変化の結果そのものはふつう客観的なことであるが、評価の段階では主観が働いて強調的な意味を帯びることになる——に、『ニなる』はそうでない場合——すなわち、単純に客観的な変化の結果その事実を叙述する場合に使われる』。ここでは、話し手・書き手の意図に応じて格助詞に変化が見られることが指摘されている。本アンケートでも、話し手の意図を示唆した設問を用意した。朴（1988）の説を裏付ける一助となれば幸いである。

4 研究方法・分析方法

日本語母語話者を対象にアンケート調査を行った。「～になる」「～となる」の形を用いる例文を、先行研究を参考に作成し、それらについて「に」「と」いずれかを回答者に選択させる設問を記載した。なお、各設問やアンケートに対してより細かな意見を得るため、自由記述欄を設けた（別添資料1参照）。

集められたアンケートのうち、各設問の回答に抜けがあるもの、年齢、性別のいずれかが無記入のものは無効回答とした。ただし、職業、出身地が無記入のものについては有効回答に含めた。有効回答者数は382名であった。〈注1〉

5 調査結果と分析

アンケートの集計結果は以下の通りである。なお、表に書かれている選択率は、小数点以下第二位を四捨五入したものである。

本調査の各設問のうち、相互に関連のあるものをピックアップし、比較・分析を行う。

5-1 接客場面に関連した設問

設問1, (コンビニで店員が客に) 合計で700円 (に・と) になります。

表5-1-1 設問1の集計 (n=382)

	に	と	差異
選択人数	331	51	280
選択率	86.6%	13.4%	73.2

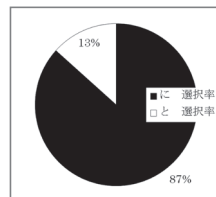


図5-1-1 設問1の選択率 (%)

(18)

設問2, (コンビニで店員が客に) 300円のお返し (に・と) になります。

表5-1-2 設問2の集計 (n=382)

	に	と	差異
選択人数	247	135	112
選択率	64.7%	35.3%	29.4

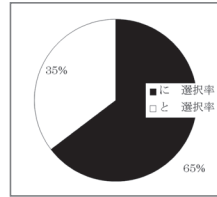


図5-1-2 設問2の選択率 (%)

設問1は、コンビニなどで店員が客に品物の合計金額を提示する際の言葉遣いである。回答者の86.6%が「に」を選択している。設問2も、設問1と同様に、接客場面を想定したものであるが、「と」を選択した回答者は35.3%と、設問1と比べて20ポイント以上増えている。

設問1も設問2も、接客する側が客に金額を提示するという点では共通している。にも拘らず、設問2において「と」を選択する回答者が多くなったのは、「となる」が変化の結果を表す性質を含んでいるためだと考えられる。客が店員に渡したお金が別の金額となってお釣りとして返ってくる一連の流れから「変化」という動きを感じた回答者が設問1よりも多数おり、その差が調査結果となって表れたのであろう。

5-2 立場の変化に関連した設問

設問3, (友人に) 内定がもらえなくて、フリーター(に・と) なっちゃったんだ。

表5-2-1 設問3の集計 (n=382)

	に	と	差異
選択人数	373	9	364
選択率	97.6%	2.4%	95.2

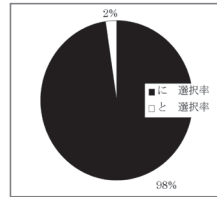


図5-2-1 設問3の選択率 (%)

設問4, (社長が入社式で) 私は長年の苦勞の末、社長 (に・と) になった。

表5-2-2 設問4の集計 (n=382)

	に	と	差異
選択人数	241	141	100
選択率	63.1%	36.9%	26.2

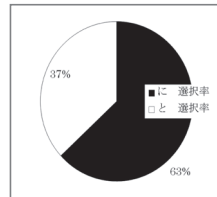


図5-2-2 設問4の選択率 (%)

設問3は、立場の変化を示すものである。回答者の97.6%が「に」を選択している。

本アンケートの自由記述において「親しい間柄では『に』を、公式の場では『と』を使うことが多いように感じます（10代 女性）」「日常生活場面では『に』を用いることが多く、少しあらたまった場面や公的な場面では『と』を用いるように思います（50代 女性）」といった意見が多く寄せられた。設問3は変化を示す文章であるが、「に」が9割以上を占める結果となったのは、自由記述に見られるように、「に」はインフォーマルな文章の中で用いられ、「と」はフォーマルな文章の中で用いられると考えた回答者が多かったものと思われる。

設問4も、設問3と同様に、立場の変化を示したものである。「に」の選択率が63.1%と、過半数を占めているものの、ポイント差は設問3に比べると小さくなっている。前述したように、多くの回答者が「と」に対して「公的」「格式張った」というイメージを抱いていた。設問4においては「入社式で」という、比較的公的な場面を設定したために、このような結果となったものと思われる。

加えて、設問3の状況は、内定がもらえなかったためにフリーターとなるという、いわば当然の帰結であるのに対し、設問4は長年の苦労が実り、社長の地位を得たという、変化まで何かしらの過程があったことが見て取れるという点で異なっている。こうした特殊な変化を表現する場合に「となる」が選ばれやすくなっているということではないだろうか。

また鈴木（1975）の記述のように、平安時代語においては、天皇やその後見役など主体の身分がとりわけ高く社会的に重要な位置づけである場合には、しばしば「～となる」が用いられていた。先に述べた「特殊な変化」と重なる面もあるが、設問4の選択率の差異が設問3に比べ差異が小さくなっていることには、両者の社会的な身分の違いに関連があるのかもしれない。

5-3 発話の対象が不特定多数である設問

設問6, (ブログの文面にて) そうこうしているうちに、夜(に・と)になってしまいました。

表5-3-1 設問6の集計 (n=382)

	に	と	差異
選択人数	340	42	298
選択率	89.0%	11.0%	78.0

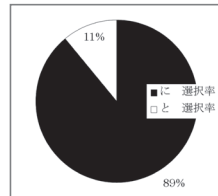


図5-3-1 設問6の選択率 (%)

設問8, (新聞の紙面で) 来年から課税対象(に・と)なることが決定した。

表5-3-2 設問8の集計 (n=382)

	に	と	差異
選択人数	137	245	108
選択率	35.9%	64.1%	28.2

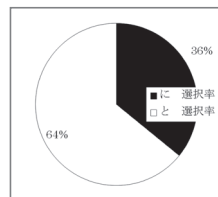


図5-3-2 設問8の選択率 (%)

設問18, (論文で) 被験者同士の会話が大きな手がかり (に・と) になった。

表5-3-3 設問18の集計計 (n=382)

	に	と	差異
選択人数	98	284	186
選択率	25.7%	74.3%	48.6

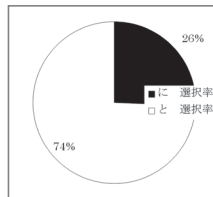


図5-3-3 設問18の選択率 (%)

設問6、8、18で取り上げたのは、発話・文章が不特定多数の人を対象としている形式の設問である。私人間でのやりとりにはなり得ないことから、公的なイメージが高いのではないかと考えられる。Makino & Tsutsui (1995) は、公的な場面や書き言葉においては「となる」が用いられることが多いと述べている。実際の集計結果を照らし合わせながら、検証していきたい。

設問6は、時間的な推移を表した文章である。89%と、9割近くの回答者が「に」を選択している。場面設定を「ブログの文面」という不特定多数に読まれるものにしたため、公的な場面で用いられる「と」の選択率が高くなるという予想をしていたが、大多数の回答者が「に」を選択するという結果が出た。ブログでは個人の日記や意見が書かれることが多いことから、インターネット上に掲載するとはいえ、私的な印象が強まってしまったものと考えられる。

設問8は、人為的に加えられた、性質の変化を表したものである。場面設定は「新聞の紙面」であり、言うまでもなく不特定多数を対象としたものである。「と」を選択した回答者が64.1%を占めており、こちらの設問はMakino & Tsutsui (1995) の記述に適合する結果となった。

「となる」の使用場面について、朴 (1988) は「変化の結果のことに評価・強調の気持ちがある場合には『となる』が用いられる」としている。設問8における変化は、時間の経過などの自然な変化ではなく、人の手によってもたらされた変化である。また「課税対象」という、多くの人の生活に関連したものであるために、意外性を表現し、強調する必要があると感じた回答者が多かったのではないだろうか。

設問18は、特定の事柄がある価値を帯びたという状況を「～(に・と)なる」で表したものである。場面設定は「論文で」であり、こちらも不特定多数の読者を想定したものである。「と」の選択率が74.3%を占めており、全設問中、最も高い数値である。この他の設問でも、不特定多数を対象とした場面設定(報道番組で・雑誌の誌面で など)のものは、「と」が優勢となった。対象が不特定多数である場合には「となる」の使用率が高くなる場合がほとんどである。

なお、アンケートの自由記述においても、「文面では『に』より『と』の方を使うように思う(20代 女性)」「かしくまったり、公的な場での発言や、文面は『と』(30代 女性)」といった「文面・誌面」においては「と」を使う場合が多いと記述した回答者が多数おり、日本語母語話者にも、そうした印象があることがわかった。設問6の例もあるように、一概には言えな

いものの、Makino & Tsutsui (1995) の唱える説は、広く一般的であると言えるだろう。

5-4 「形式的用法」に関連した設問

設問10, (レストランで開店時間を尋ねられた店員が客に) 開店は午前10時(に・と)になります。

表5-4-1 設問10の集計 (n=382)

	に	と	差異
選択人数	198	184	14
選択率	51.8%	48.2%	3.6

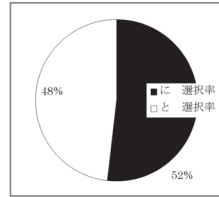


図5-4-1 設問10の選択率 (%)

設問13, (報道番組で) 復興には長期的な支援が必要(に・と)になります。

表5-4-2 設問13の集計 (n=382)

	に	と	差異
選択人数	143	239	96
選択率	37.4%	62.6%	25.2

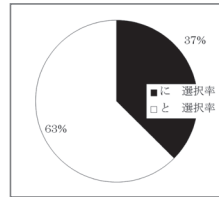


図5-4-2 設問13の選択率 (%)

設問13は、鈴木(1975)の指摘した「形式的用法」に関係する内容である。「形式的用法」とは、動詞「なる」が変化の意味を持たないものであり、平安時代語においては、ほぼ「になる」が用いられているとされている。

設問10は、特定の時刻を「～(に・と)なる」の形で示したものである。「に」「と」の選択率は、ほぼ半々という結果が出ている。文章の構造だけを捉えた場合、動詞「なる」に「変化」の意味は無く、特に強調すべき事柄も無いが、「と」の選択率が比較的高くなった。

設問13は、具体的な行為について「必要(に・と)なる」という形を当てはめたものである。「と」の選択率は62.6%と、高い数値を示している。場面設定が公的なものであること、「今後必要となってくる」という意識を際立たせるために、「と」を選ぶ回答者が多くなったのではないかと推察できる。

上記で取り上げた二つのもの以外では「形式的用法」が用いられている設問は、「に」の選択率が高くなった(先に挙げた設問1・2など)。よって、「形式的用法」に、一概にどちらが用いられるとは言いきれない。ただし、平安時代語と比べた場合、「形式的用法」で用いる「となる」が認められつつあると言える。

5-5 意外性・驚きの気持ちに関連した設問

設問15, (学生が友人に) 今日の実験は、当初の予想を覆す結果 (に・と) になったんだ。

表5-5-1 設問15の集計計 (n=382)

	に	と	差異
選択人数	235	147	88
選択率	61.5%	38.5%	23.0

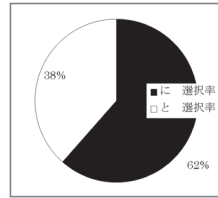


図5-5-1 設問15の選択率 (%)

設問16, (論文で) 検証したところ、次のような結果 (に・と) になった。

表5-5-2 設問16の集計計 (n=382)

	に	と	差異
選択人数	167	215	48
選択率	43.7%	56.3%	12.6

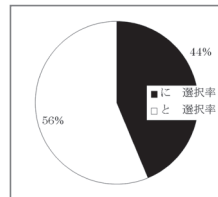


図5-5-2 設問16の選択率 (%)

朴(1988)は、変化の結果に意外性や驚きの意味を持たせたい場合に「と」が用いられやすくなると述べている。ここでは、設問15・16を取り上げ、それを検証する。

設問15は「結果(に・と)なる」を口語的に表現したものである。「当初の予想を覆す」という、意外性を示す表現があるにも拘わらず、「と」の選択率は38.5%に止まっている。

設問16は「結果(に・と)なる」をフォーマルな書き言葉で表現したものである。設問15とは対照的に、「と」の選択率が56.3%と、過半数を占めている。

設問15と16を比較した場合、設問15の方には「当初の予想を覆す」という、驚きの感情を示した表現があるにも拘わらず、「と」の選択率は設問16の方が高い。このことから、意外性の有無よりも、公私の区別、書き言葉・話し言葉の区別がより重要な要素となっていると言える。

6 まとめ

本稿では、日本語母語話者が「になる」と「となる」をどのように使い分けているのかを研究対象とし、アンケートを用いて調査を行った。集計結果を分析したところ、以下のようなことが判明した。

格助詞としての汎用性の高さから、多くの場合は「になる」が選択される。一方、「となる」が過半数を占める場合の、最も特徴的な共通点として、不特定多数を対象としていることが挙げられる。そうした、広く世の中に知らしめるような形での発言・記述の場合、フォーマルな言葉遣いが求められることが多い。よって、「に」よりも「と」の方がよりフォーマルな文体に適していると考えられる。しかし、客に対する店員の発言など、フォーマルな言葉遣いが相

応しいと思われる場面設定であっても「に」の選択率が圧倒的に高くなる設問もあった。その点から、立場の差などよりも、対象が限定されているか、そうでないのかが、「になる」「となる」の選択に際してより重要な意味を持つものと思われる。

加えて、文面として書かれているものの場合にも「と」が選ばれることがほとんどである。特に新聞・論文など、より公的な文書において顕著な結果となった。前述したように、不特定多数の対象を想定した文章では「と」が選ばれる傾向にあると言える。なお、本調査では、個人や、ある特定の複数人を対象とした書き言葉についての調査は行っていない。その点は不十分であるので、追って調査する必要があると言える。

本調査によって、日本語母語話者が「になる」「となる」を無意識にどのように使い分けているのかが、ある程度浮き彫りにできたと言える。無論、本稿で提示した、使い分けの「ルール」には100%の正答は無く、あくまでも参考といったところに止まるものでしかない。しかしながら、冒頭で紹介した外国人日本語学習者の疑問、その求められる回答への手掛かりにはなったと考えている。本調査で得られた、実際の日本語母語話者の使用状況と照らし合わせながら、先に述べたような解説を取り上げることで、日本語学習者の理解の手助けとなれば幸いである。

〈注1〉

アンケート回答者の内訳は、男性 (125) : 女性 (257) で、職業別内訳は、学生 (72) : 社会人 (291) : 無記入 (19)、年代別内訳は、10代 (40) : 20代 (36) : 30代 (76) : 40代 (93) : 50代 (81) : 60代 (38) : 70代以上 (18)、出身地別内訳は、山口県 (184) : 福岡県 (44) : 岡山県 (29) : 島根県 (23) : 大分県 (21) : 広島県 (21) : 長崎県 (16) : 大阪府 (5) : 佐賀県 (4) : 鳥取県 (4) : 兵庫県 (3) : 香川県 (2) : 神奈川県 (2) : 岐阜県 (2) : 徳島県 (2) : 北海道 (2) : 愛知県 (1) : 秋田県 (1) : 茨城県 (1) : 鹿児島県 (1) : 京都府 (1) : 熊本県 (1) : 群馬県 (1) : 高知県 (1) : 千葉県 (1) : 東京都 (1) : 富山県 (1) : 無記入 (7) であった。(単位 : 名)

【参考・引用文献】

- 大岩正伸 (1959) 『文語文法概要』東京堂
 国立国語研究所 (1951) 『現代語の助詞・助動詞 一用法と実例一』国立国語研究所
 鈴木一彦 (1990) 『日本語文法をみつめた文法・現代語』東苑社
 鈴木泰 (1975) 「中古に於ける動詞『ナル』の用法と助詞『ニ・ト』の相関」『国語と国文学』第52巻 pp.56-70 東京大学国語国文学会
 朴在權 (1988) 「変化の結果を表わす『ニなる』と『トなる』について 一現代日本語の場合一」『中央大学国文』31号 pp.125-143 中央大学国文学会
 Seichi, Makino and Michio, Tsutsui (1995) *A Dictionary of Intermediate Japanese Grammar* The Japan Times
 森田良行 (1994) 『動詞の意味論的文法研究』明治書院
 山田孝雄 (1954) 『日本文法講義』寶文館

(さくま・ひろき)

(別添資料1)

格助詞に関するアンケート

1. カッコ内の格助詞のうち、いずれか一つを選んでください。

1. (コンビニで店員が客に) 合計で700円 (に・と) になります。
2. (コンビニで店員が客に) 300円のお返し (に・と) になります。
3. (友人に) 内定がもらえなくて、フリーター(に・と) なっちゃったんだ。
4. (社長が入社式で) 私は長年の苦勞の末、社長 (に・と) になった。
5. (自宅で友人に) 息子は来年から小学生 (に・と) なるんだよ。
6. (ブログの文面にて) そうこうしているうちに、夜 (に・と) になってしまいました。
7. (友人に) この町に来てから、もう3年 (に・と) なるんだよ。
8. (新聞の紙面で) 来年から課税対象 (に・と) なることが決定した。
9. (討論番組で出演者が) 消費税が10パーセント (に・と) なることには反対です。
10. (レストランで開店時間を尋ねられた店員が客に) 開店は午前10時 (に・と) になります。
11. (駅員が利用者に) 1番ホームはあちら (に・と) になります。
12. (雑誌の誌面で) 巷では、アイドルの結婚報道が話題 (に・と) なっています。
13. (報道番組で) 復興には長期的な支援が必要 (に・と) になります。
14. (法律家が依頼人に) 弁護士が代理人 (に・と) なることができます。
15. (学生が友人に) 今日の実験は、当初の予想を覆す結果 (に・と) になったんだ。
16. (論文で) 検証したところ、次のような結果 (に・と) になった。
17. (医者が患者に) 喫煙は回復への大きなリスク (に・と) になります。
18. (論文で) 被験者同士の会話が大きな手がかり (に・と) になった。
19. (報道番組で) 今回の調査によって、新たな事実が明らか (に・と) になりました。

2. 何かお気付きの点や、ご意見などがありましたらご記入ください。

性別 (男 ・ 女) 国籍 () 出身地 () 都道府県
職業 (学生 ・ 社会人)
年齢 (10代 20代 30代 40代 50代 60代 70代以上)

ご協力ありがとうございました。